

hito*yume
インタビュー

巻頭特集

池上彰

著作で、あるいはテレビで、わかりやすく、説得力にあふれた解説で、
ぐいぐいと人を引き込むジャーナリストの池上彰さん。

取材の当日は、その前日にアフリカ北東部のジブチ共和国から26時間かけて帰られたばかり。
その疲れを見せることもなく、終始おだやかな笑顔で、お話に応じていただきました。

子どもたちの未来、教育の大切さ、3・11後の日本、
ジャーナリストとしての鋭い視点の中にも、未来を信じる温かさがありました。



【いけがみ あきら】
ジャーナリスト。1950年、長野県松本市生まれ。慶應義塾大学卒業後、1973年にNHK入局。記者やキャスターなどを歴任し、1994年から11年間は「週刊こどもニュース」のお父さん役として活躍。2005年よりフリーに。わかりにくく複雑なニュースの真相をわかりやすく解説することで定評がある。近著に「伝える力2」(PHPビジネス新書)「世界を変えた10冊の本」(文藝春秋)等、多数。

TOSHIBA
Leading Innovation >>>

いざというときの事業継続、 備えは充分ですか？

リモートクライアント

社外から、社内の自席PCに
セキュアにアクセス*1。

*1: VPNなどでネット接続されている環境が必要です。

バックアップ

クライアントPCのデータを
自動的にバックアップ*2。

*2: 帯域が確保されていれば、遠隔地のサーバーにもバックアップが可能です。

資産管理

利用中ソフトウェアの
一覧管理が簡単に。

中堅・中小規模企業向けクライアント管理システム

SmartUJ

**資産管理、情報漏えい対策と
運用支援をこの1台で!**

「SmartUJ」は、情報漏えい対策からPCの資産管理・運用管理、さらに自席PCのデスクトップ環境をネット経由で再現する機能(リモートクライアント)までもカバーする製品です。機能別の購入も可能で、導入しやすくなっています。

詳しくは
または、<http://smartuj.toshiba.co.jp/>

- ▶ リモートクライアント
- ▶ PCデータバックアップ
- ▶ 資産管理
- ▶ 操作監視
- ▶ 操作制御
- ▶ 不正PC検出・遮断

※Active Directory
構築ツールを提供

信頼性に優れた
インテル® Xeon® プロセッサ
E3-1220 以上を推奨

●「SmartUJ」は東芝の商標です。●Intel、インテル、Intel ロゴ、Intel Inside、Intel Inside ロゴ、Centrino、Centrino Inside、Intel vPro、Intel vPro ロゴ、Celeron、Celeron Inside、Intel Core、Core Inside、Pentium、Pentium Inside、vPro Inside、Xeon、Xeon Inside は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。●Microsoft、Windows、Windows Server、Active Directory、Vista は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。●本資料に掲載の商品の名称は、それぞれ各社が商標として使用しているものがあります。●資料の内容はおりなしに変更することがあります。

株式会社 東芝
ネットワーク&ソリューション統括

〒105-8001 東京都港区芝浦1-1-1
Email: pcman@ieg.toshiba.co.jp

東芝情報機器株式会社
プラットフォーム・ソリューション本部

〒135-8505 東京都江東区豊洲5-6-15 (NBF豊洲ガーデンフロント)
Email: pcman.info@toshiba-tie.co.jp

東芝グループは、持続可能な地球の未来に貢献します。

eco スタイル

東日本も必ず復興できます。 日本にはそういう復興の歴史があるのです

情報収集と発信

ジャーナリストとして長い経験をおもちの池上さんですが、NHKに入局された際、最初の赴任地は島根県とお聞きしました。

NHK、あるいは新聞社等の場合、最初から東京に赴任する、ということはありません。これは、地方都市でしっかりといろいろなことを体験して基礎をつけていこう、ということなんです。大都市ですと、当然記者の数も多いので、5年間警察しか担当できないなんてことがあります。また自分の書いた原稿がいつになっても放送されないこともあります。これが小さな局ですと、人数も限られていますから、警察、検察から県庁、ありとあらゆるところを取材することができて、地方から見た日本の仕組みと、ということをつぶさに学ぶことができるのです。また、自分の書いた原稿が片っ端から放送されますから、記者としての力も身につけていくのです。

若者が記者の「経験」を積む上では、小さな町ほどふさわしいということなんです。

池上さんはジャーナリストとして、あらゆる分野に関心をもち、膨大な情報を収集しながら、それらを整理し、さらに発信もされていますね。

ニュースを解説しようと思うと、やはりニュースの背景や周辺を知っていなければなりません。わたしは新人記者時代に最初、警察から始めて、地方都市の政治、経済、行政などあらゆるところをまわって、その仕組みなどを学ぶことができました。東京へ来てからは、警視庁、気象庁、文部省(当時)などを担当し、文部省では教育行政について学びました。もちろん取材のためには事前に、それぞれの分野について必死になって勉強もしました。

そういう体験がわたしの根底にありますから、例えば、このニュースについて解説をしないと言われた場合、かなりの部分でわたし自身のこれまでの体験が役に立つわけです。

こうしたさまざまな体験がわたしの基礎になっています。

やはり自分の目で見て考えてという「体験」がベースにないと、ものごとを理解することは難しいのです。

ます。これは他の地方自治体の公務員とは異なる立場であり、そこに教育の独立性というものがあることがわかります。つまり、自分の体験してきたことを、もう一度客観的に、自分の中で論理的にとらえ直してみることによって、他人に、よりわかりやすく説明できるよくなるのです。

小学校で先生が子どもに教えているのは、そのほとんどが先生自身が子どものころに体験してきたことばかりです。そのようなさまざまな体験や見聞の中で、「あ、これ授業に使えるな」というひらめきは、意識してまわりを見渡していれば、必ず発見することができます。日常生活の中にあるさまざまなことを自覚して見つめる、ということが大切なですね。

3.11後の日本を考える

2011年3月11日は、東日本大震災という未曾有の災害が日本を襲いました。ジャーナリストとして現場に立ち、また報道もされましたが、ジャーナリストとして3.11をどのようにお感じになりましたか？

これまでにもわたしは何度も災害の現場に立ってきました。しかし今回、とりわけ辛い思いにさいなまれるのは、津波によって「すべてなくなってしまう」という状況だと思うのです。まさに根こそぎという表現がぴったりくるような、行けども、行けども、何も無い状態が続くのです。まさに言葉がありませんでした。

しかしふと気がついたのは、この状態というのは、実は66年前に日本が体験した、あの戦後の焼け野原ではないか、ということでした。

いまはまだ大変な状態ですが、かつての震災から日本が復興できたように、東日本もまた必ず復興できる、日本にはそういう復興の歴史がある、そのことを子どもたちに伝えなければならぬと思います。

震災だけではなく、経済の問題も、本当に混沌としています。このことから、本当に日本は立ち直ることができるのでしょうか？

2011年7月、朝日新聞社主催の出張授業企画「オーサー・ビジット」の講師として、東日本大震災の被災地、宮城県東松島市の小学校を訪れ

例えば、学校の先生は教員免許を取得しなければならぬ、ということになっていますね。これも当然のこととしてとらえられていると思いますが、では「なぜ、教員免許を取得しなければならぬのか？」と考えてみましょう。

そもそも教員は、子どもたちを教育するために、一定の知識やスキルが求められるために、またその能力を認定する仕組みとして「教員免許」があるんだ、ということがわかりますよね。また、教員という立場を考えてみると、教員は地方の教育委員会によって採用されてい

ました。このとき、東松島市の子どもたちに、1945年の夏、原爆が投下された直後の広島市の街地の写真や東京下町の写真を見せて「これはどこだと思おう？」と聞いてみたのです。すると子どもたちは口をそろえて、「東松島だ」と言うのです。

わたしは、「ここに見えているのは、1945年の第二次世界大戦後の日本の姿なんだよ」と教えました。子どもたちはあつげにとられていました。日本にもかつてこんな時代があったんだ、と。そしてわたしは子どもたちに1945年の、何もかもなくなってしまう状況から日本が今日まで復興してきた歴史を伝えました。この復興を成し遂げたのは、希望をもって、真面目に働き、いつか豊かになることを信じてがんばった日本人だったのです。

そんな話を聞いているうちに子どもたちの表情はイキイキとしてきます。子どもたちなりに絶望的な思いや辛い思いに打ちひしがれている中で、日本がたどってきた歴史についてわかりやすく伝えることができると、子どもたちに元気を与えることができるのです。

それは未来に対する希望ということなのかもしれませんね。



東日本大震災の被災地、
宮城県東松島市にて
(朝日新聞社提供/撮影:御堂義乗)

何もかも失ってしまった
第二次世界大戦後の焼け跡から復興し、
さらに戦前を上回る今日の繁栄を
取り戻すことができたように。

新エネルギーは、 人類の夢

東京電力福島第一原発の問題は、東日本の方々にとつてきわめて深刻な問題です。また日本の今後のエネルギー問題を考える上でも大きな投げかけだと思つたのですが。

現在、日本には54基の原子炉がありますが、そのうち10基しか動いていません(2011年11月現在)。原子力発電所は13カ月に一度、原子炉の運転を止めて定期検査をすることになつています。ところが一旦止めた原子炉は、現在なかなか再稼働できません。そうすると、このままいくと2012年の春ごろには否応なくほとんどの原発がストップして、「脱原発」状態になる、と考えられます。

こうなると、もはや「脱原発」か「原発依存」か、という選択の問題ではないのです。この状況をどう受け止めるのか、ということですね。わたしたちは「脱原発」という現実と向き合い、ここから出発しなければならぬのです。ということになれば、節電はもちろんです。とりあえずは火力発電に頼らざるを得ません。現在、火力発電



ジブチにあるソマリアからの難民キャンプを訪問
([未来世紀ジブチ]2011年11月14日放送、テレビ東京)

です。このキャンプには隣接するソマリアから連日のように大量の難民がやってきます。現在では7000人も入ればいっぱい、のキャンプに、2万人もの難民がいて、当然食糧事情も最悪です。多くの餓死者も出ています。

この国に、欧米のNGOがつくった8年制の学校があります。わたしたちがここを取材しているときのことです。この学校に通う12歳の少女が突然、わたしたちロケチームに対して、お願いしたいことがある、と言うのです。「この8年間が終わったら、わたしは難民キャンプに戻っていかなければなりません。しかし、そこにはほとんど

では天然ガスを使ったほうが、エネルギー効率から見ても、また二酸化炭素の排出問題から見ても、はるかによいということがわかってきています。とりあえずは天然ガスの火力発電によって原子力の穴を埋めることはできるわけですが、いつまでも、というわけにはいきません。中長期的には「再生可能エネルギー」を検討していかねばなりません。とはいっても、その風力も太陽光も、現時点ではエネルギー効率は非常に悪いのです。

こうした問題を克服していくのは、とても難しいでしょう。でも、そのような問題を克服して、新しいエネルギーの時代をつくるのは、人類の夢であり、その夢に挑戦するのは、現代の子どもたちです。日本の豊かな未来のために、ぜひ子どもたちに挑戦してもらいたいと思います。

教育の大切さ

アフリカで、小学校の教育しか受けていない青年が、自力で風力発電をつくって話題になりました。彼が来日した際に、インタビューされていますね。

ど仕事がないのです。わたしはもともと勉強がしたい、だからここに高校をつくつてくれませんか？」

こんなことを理路整然とわたしたちに訴えるのです。それはもう必死の思いだったのでしよう。日本で言えばまだ小学生でしょう。彼女はこの上の教育さえ受けられれば、未来は必ず開けると確信しているのです。わたしを含めてそこにいたスタッフたちは、彼女の真剣な表情に圧倒されながら、「日本の高校生たちに伝えたいね」と語り合ったものでした。

教育の大切さというテーマで、もうひとつお伝えしたいことがあります。かつてアフリカでこんなことがありました。干ばつで飢餓が広がって、お母さんが母乳で子どもたちを育てられないうという深刻な事態になったのです。これを聞いた世界中の先進国から、粉ミルクが届けられました。

その結果、何が起きたのでしょうか？なんと乳児死亡率が跳ね上がってしまったのです。

粉ミルクは水で溶かさねばなりません。アフリカの母親たちは、何も知らずに汚れた水を使って粉ミルクを溶かしたんです。それが原因だったのです。お母さんたちはちゃんとした教育

アフリカ南東部にあるマラウイ共和国のウィリアム・カムクワンバ君という青年ですね。「風をつかまえた少年」という本になりました。彼は家が貧しくて、小学校しか行けなかった。彼は父の農業を手伝っていましたが、どうしても勉強がしたくて、家の近くにあったNPOがつくった図書室に通うようになりまし。ここで出会った本によって彼が学んだことは、ひとつは「電力が国の経済を助ける」ということ、もうひとつは「どうすれば電気を起こすことができるか」ということなのです。

彼の住んでいる地域には電気がきていませんでした。しかし、電気を起こすことができれば灯りがつくし、ラジオを聞くことができる、と気がつく。彼は独学で、物理の本を読みながら、廃品の中から必要なものを探し、発電機を組み立てていく。そしてついに屋根の上に風車を立てて、電気を起こしたのです。当時彼は14歳です。学ぶということが、これほどまでに人生を豊かにしてくれる、そういうことを教えてくれる例だと思います。

実はわたし、アフリカ北東部にあるジブチ共和国というところでソマリアの難民キャンプを取材してきたところを受けていませんから、読み書きもできなければ、衛生観念もありませんでした。それがこんな悲惨な事態を招いたのです。

外から帰ったら手を洗いなさい、汚れたものを口にはいけません、といった日本の子どもたちにとっては、ごくあたり前の常識が、アフリカの母親たちには備わっていなかったのです。読み書きができる、たったそれだけのことが、実は生きる力なんです。

教育とは生死にかかわることでもあるんです。どう子どもたちに感じてもらおうかです。

教師という仕事について

新人の教師にとつて、教室でまず子どもたちの心をつかむことはとても難しい問題です。その秘訣があればぜひ教えてください。

大人が子どもにものを教えるのは大変難しいことです。ともすれば「そんなこともわからないの」と言いたくなります。わたしも「週刊こどもニュース」を始めたころには何度もそういう絶望的な気持ちになりました。

でも見方を変えれば子どもたちが、

教育は生きる力を与えてくれる。
それは時として生死に関わることもあります



TXシェールガス探採施設を取材する池上さん
([緊急生放送! 池上彰のエネルギーを考えるSP]
2011年9月18日放送、テレビ東京)

さまざまな課題を解決して、
新しいエネルギーの時代をつくるのは、
人類の夢であり、
その夢に挑戦するのは、現代の子どもたちです。

“わからない”と自由に言える文化をつくるのが大切です

あることを「わからない」という事は、ひとつの「発見」だと思うのです。何がわからないかが、わかる。それは、子どもたちに何を教えたらいいかを考えるきっかけになります。その事実から創意工夫、研究が始まるのです。

実際、「週刊こどもニュース」の子どもたちは、いつでもわたしのとつての先生でした。ひたすら子どもたちに教えられるんです。

でも、子どもたちがいつも「わからない」と言ってくれるとは限りません。「わかる？」と聞くと、子どもたちは「うん」と言うんですね。じゃあ説明して、と言うと実はわかっていない。

ですから教室でもどこでも、子どもたちが「わからない」ということを正直に、また気軽に言える環境づくりが大切だと思うんです。わたしが「週刊こどもニュース」の中で、いちばん大切にしたのは、実はそのことなんです。もし「わからない」という言葉が出たら、「えーそんなこともわからないの？」と絶対に責めたりしません。そうやって「わからないところ」を明らかにして、疑問点を説明していくと、それを見ていた子どもたちも、「わからない」と正直に言うことが、決して悪いことではないと気づきます。それでも

最後に、池上さんがお考えになる理想の教師像を教えてください。

わたしは、教育について調べたり考えたりする中で、日本の義務教育は本当によくできていると思うようになりました。

例えば日本の中学校の教科書をいま、すべて理解していれば、世界で通用する大変な物知りということになると思います。先ほどのマライイのカムクワン君の話ではありませんが、発電の仕組みについてもちゃんと勉強しなすからその気になれば、電気をつくることも可能かもしれません。理科の第一分野ですね。

英語にしても、中学校で基本的な文型はすべてやりますから、あとは単語さえ覚えていけば大丈夫です。まさに世界で通用する内容といつても過言ではありません。小学校で受ける教育というのは、中学校で習うことの基礎なんです。小学校の教育をしっかり身につけて中学で学べば、カムクワン君のような青年が生まれてくる。そういう可能性を日本の義務教育はもっていると思います。

ちよつと古い小説になりますが、壺井栄が1952年に書いた『二十四の瞳』の大石先生ですね。うれしいときは子どもたちといっしょに喜び、悲しいときは子どもたちといっしょに泣く。「泣きミン先生」と呼ばれていた先生です。

先生には、知識の量とか、スキルとか求められることはたくさんあると思います。でもそれだけじゃないんです。人間として子どもたちとどう向き合うか、そのことを教えてくれています。

要するに子どもと同じ目の高さで向き合うということだと思います。話を聞くとときに、子どもの視線まで、姿勢を低くする。上から見下ろすのではなくて、同じ目の高さで話し合う。子どもたちに話を聞くといいのは、その時点で子どもたちと対等の立場であり、子どもたちを一人前に扱っているということですね。大石先生は教えてくれていると思うのです。ぜひ一度読んでみてください。教師として何かしら、感じるところがあるのではないのでしょうか？

自分ひとりだけわからないとどうしても言い出しにくかったりします。そういう場合に勇気を出して言ってくれたら、「ああとつてもいいこと言ってくれたね」と感謝の言葉を言う。その子どもを褒めるんです。

何がわからないかがわかったら、そのことについて、もう半分はわかったも同然だと思えます。その時点で、その問題に対して興味が出てきます。授業で、何がわからないかもわからない、それではちんぷんかんぷんです。それでは授業が楽しいはずがありません。

まずクラスの中で、「わからない」ということを自由に言える文化をつくること

とこそが大切だとわたしは思います。それができれば、子どもたちは自然に問題に対して興味をもち、授業に向き合ってくれるようになると思います。

優れた日本の義務教育

日本の教育制度、義務教育についてどのように思われますか？

日本では、中学校・高校へ行くこと、あるいはその先、大学で学ぶことも当たり前になっています。しかし、中学校や高校・大学へ行くことは実は当たり前ではありません。地球規模で見れば



池上彰ライブラリー

コラム

お話の中にも出てきた著作、あるいは池上彰さんの最新作等をピックアップ。ぜひ一度目を通していただきたい本ばかりです。



『風をつかまえた少年』
著者／ウィリアム・カムクワンバ、
ブライアン・ミラー
池上彰(解説)、田口俊樹(訳)
出版／文藝春秋
発行日／2010年11月

アフリカでもっとも貧しいといわれるマライイ共和国で、貧困のために中学校へ行けなかったひとりの少年。彼は図書館で出会った一冊の本から、まったく独学で風力発電を学び、自ら創り上げてしまったのです。学ぶことの大切さ、教育の大切さを教えてくれる感動の実話です。池上彰さんが、「知識が力となるために」と題して解説を書いておられます。



『日本がもし100人の村だったら』
著者／池上彰
出版／マガジンハウス
発行日／2009年11月

さまざまなテーマで、海外と比較して、あるいは過去と比べて、日本のカタチをわかりやすく浮き彫りにする一冊。例えば「世界がもし100人の村だったら、26人の家には電気がきていません」「(日本の)小学生100人のうち、99.5人は中学校に行きます。世界一の就学率です」など、欄外には解説。巻末には数字の出典と注釈があります。また池上彰さんと「世界がもし100人の村だったら」の著者池田香代子さんのあとがき対談も掲載しています。



『二十四の瞳』
著者／壺井栄
出版／光文社
発行日／1952年

第二次世界大戦を間に挟んで、分教場(現在の分校)の女性教員と、12人の教え子たちの、20年間にわたる心温まるドラマ。戦争に翻弄【ほんろう】されながらも明るく生きる子どもたち、またその子らを見つめ、共に成長する主人公、大石先生。豊かになった現代の日本が忘れてしまった、人と人とのふれあいが描かれる。



『世界を変えた10冊の本』
著者／池上彰
出版／文藝春秋
発行日／2011年8月

「わたしたちは不安と混乱の中にいます。こんなときだからこそ、活字の力を見直したい。書物の力を再認識したいと思っています(池上彰)」そんな思いで執筆された一冊。池上彰さんのわかりやすい解説とともに、現代を読み解く「新古典」10冊を紹介しています。